

『この愛に溺れろ』

著：早水しほり

ill：桜城やや

古峰の本家の扉を冬紀が勢いよく開けると、中から組員たちが飛んできた。敵の殴り込みと勘違いしたのか懐に手を入れていたり、銃を両手に構えていたりする者もいた。

しかし、冬紀の姿を見るなり、全員が平伏した。

「姐さん！」

その呼ばれ方をすると、冬紀の不機嫌メーターは半端じゃないくらいに上がっていく。

「三虎はどこだ」

冬紀は、玄関で仁(に)王(おう)立(だ)ちになった。

「冬紀さん、いらっしゃいませ」

奥から、落ち着いた足取りで、三虎の懐刀である曾(そ)我(か)部(べ)が姿を現す。

彼は、相変わらず一分の隙もないスーツ姿だ。

冬紀の前に手をついた曾我部は、顔を上げて鋭い眼光を放った。

「これは、どのような騒ぎでしょうか」

「三虎はどこです」

曾我部の静かな迫力も、今の冬紀には通用しない。

陰呑な表情で、居(い)丈(たけ)高(だか)に冬紀は尋ねた。

「組長は、奥に。お会いになられますか？」

「ええ」

「…かしこまりました」

一瞬言葉に詰まった曾我部だが、冬紀の形相が凄(すさ)まじかったせいなのか、立ち上がって冬紀を奥へと通した。

三虎の部屋は、古峰の本家の一番奥にある。

立派な中庭が見える私室で、三虎は休んでいた。

「…三虎！」

彼の姿を見た途端、冬紀は怒鳴りつける代わりに顔を青ざめさせた。

そして、慌てて三虎に駆け寄る。

三虎は右腕に真新しい包帯を巻かれて、床に入っていた。

「冬紀、どうして…」

三虎は男らしい眉を寄せて、ちらりと曾我部を見上げた。

「冬紀には知らせるなど言っただろう？ たいしたことはないんだ」

「いいえ、私は何も。ただ、冬紀さんが必死の形相をしていらしたので、どこからか話が漏れたのかと」

曾我部は、低い声で呟く。

「…玄関で姐さんが立ち回りを演じられると、組の者どもが動揺いたします」

NGワードを繰り出されて、冬紀は口元を引きつらせた。

けれど今は、姐さんと呼ばれようがかみさんと呼ばれようが、かまっている時と場合

じゃない。

「要平の言ったとおりだな」

冬紀は掠れた声で呟く。

要平が冬紀に教えてくれたのは、思いがけない現状だった。

古峰会と、長年のライバルである関東龍星会の抗争が、ここ数ヶ月激しくなっていること。

三日前、とうとう三虎が龍星会側の鉄砲玉に切りつけられたということ。

抗争が多発していることには気がついてしたが、年末も近く、人の心が浮き足だつ時期だ。

そして、金の動きが激しくなる。

昔ながらのヤクザの財源はお祭りごとに関わるものも多いので、それに絡んで小競り合いが起きているのかと思っていた。

まさか三虎が切られて、そのせいで一触即発になっているなんて、思いもしなかった。

「縫ったのか？」

畳に膝をついた冬紀は、三虎の腕に怖々と触れた。

「いや、掠り傷だ」

青ざめた冬紀を宥(なだ)めるように、三虎は腰に手を回してきた。

「なんだ。俺が心配で、泣いちゃったか？ ん？」

耳元で囁かれた声は、じわっと甘い。

「馬鹿野郎！」

冬紀は容赦なく、三虎の顔を拳(げん)骨(こつ)で殴った。

「布団に沈め！」

「ったく、二週間ぶりだつてのに、素直じゃねえな。まあ、そういうところも可愛いんだが」

冬紀に殴られた箇所をさすりながら、三虎は首を竦める。

「もう少し素直になってほしいこともあるぞ。俺の声聞きたくなったら、自分から電話するとか…。電話がないと不機嫌になるくせに、おまえからは絶対に電話くれないんだもん」

「今、俺はそういう話をしたいわけじゃないんだが」

どうして胸の中が、こんなにイガイガしたもので刺激されている気分になっているのか、冬紀にもさっぱりわからない。

でも、どうしようもなく腹が立った。

「どうして要平は知っているのに、俺には知らせなかったんだ？」

冬紀は、真新しい包帯をジロリと睨みつける。

「そりゃ、要平は一応、うちの者だし」

三虎は、頭を搔いた。

(うちの者、だって…?)

冬紀は、奥歯を噛みしめる。

(じゃあ、俺は他(よ)所(そ)の者だってことか!?)

冬紀はやり場のない怒りに、拳を固く握りしめる。

曾我部が懐に手を突っ込んでいなかったら、もう一度殴ってしまうところだった。

確かに三虎が言うとおり、要平は神野一家の組長であると同時に、古峰会の大幹

部の一人でもある。

三虎の身に何かあったら、すぐに連絡が行くだろう。

だが、冬紀だって古峰会の顧問弁護士だ。

そして、三虎の恋人でもあるのだ。

(なんで、俺に知らせないんだ…！)

この、苛立ち。

冬紀は思わず、自分の胸元を掴んでしまった。

胸が苦しい。

「そんなに怒るな。死にはしないんだから」

三虎はそう言って、冬紀を逞しい胸元に抱き寄せた。

(そういう問題じゃない…)

どう言えば、伝わるのか。

確かに冬紀は、以前誰が好き好んでヤクザと関わったりするものかと、突っぱねていた。

とはいえ今の冬紀はもう、三虎を選んでいるのだ。

彼の恋人として、顧問弁護士として生きていく道を。

それなのに、部外者みたいな扱いを受けるなんて…。

(いったい俺は、おまえにとってなんなんだ?)

今までそんなふうには、疑問を持ったことはなかった。

けれど、こんなことをされてしまうと、暗雲が胸の中に立ち込めてくる。

心配させるからというのは、確かに大きな理由なのだろう。でも、仕事に関わるこんな重要な、しかも恋人の命に関わるかもしれないことまで、教えてもらえないなんて……。

本文 p39～44 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>